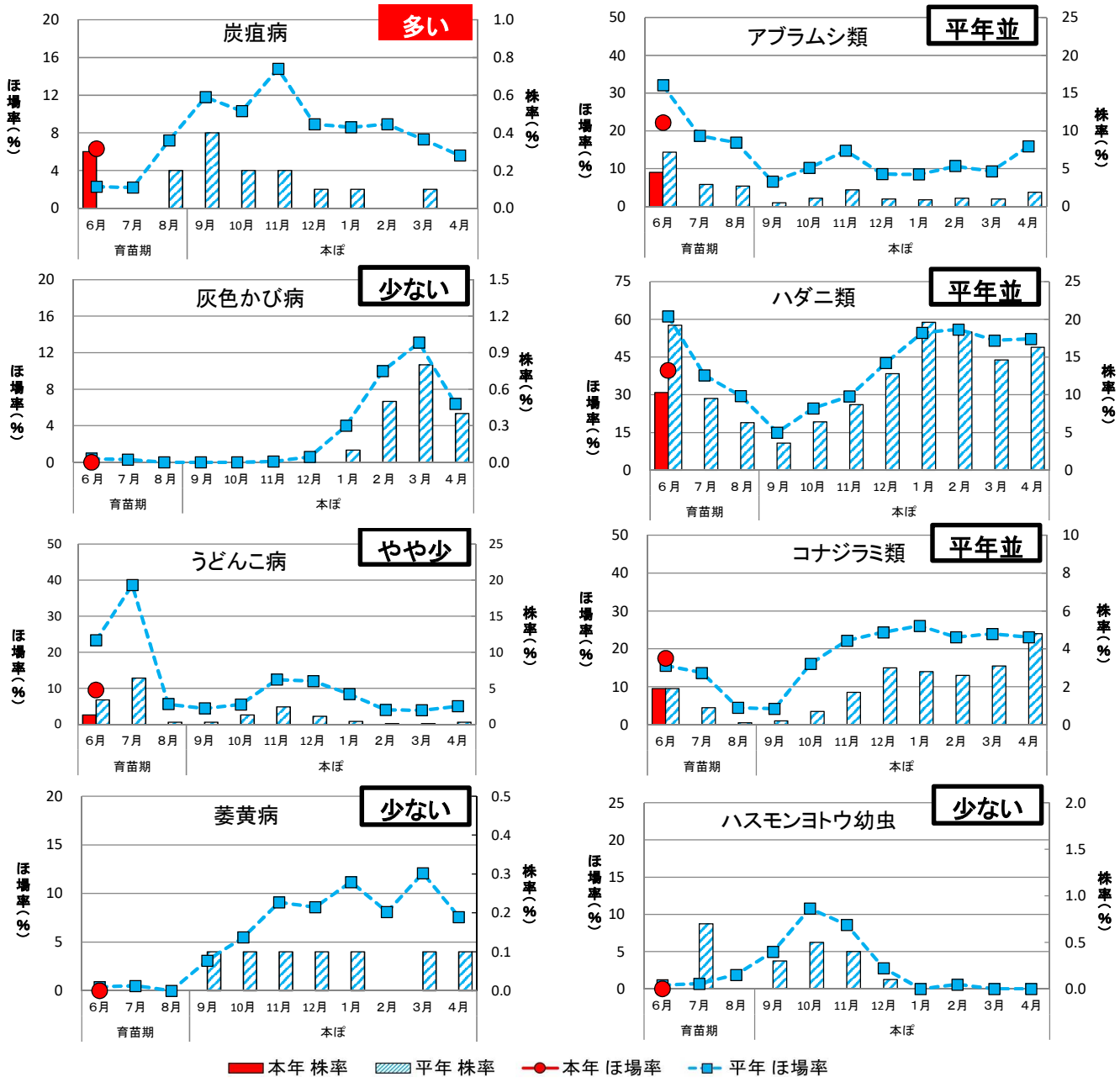
# いちご病害虫情報第１号（６月）

令和４(2022)年６月17日
栃木県農業環境指導センター

## ■　病害虫の発生状況　　【総調査ほ場数：　63 か所 】




※ほ場あたり25株調査　※株率（%）：発生株数／調査ほ場数×25株　※ほ場率（%）：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

## ■　今月の防除ポイント

一部のほ場で炭疽病の発生が見られ、平年よりもほ場率が高い状況となっています。炭疽病菌は高温多湿の環境を好むため、梅雨時期以降から発病が目立ってきます。葉上の斑点型病斑や青枯れ症状（写真１）を見逃さないよう注意しましょう。

罹病株は早急に取り除き、ほ場外で適正に処分しましょう。

〇親株の生育状況をよく観察して、炭疽病などの病害が疑われる株や、生育不良株からは 採苗せず、健全な株から採苗を行いましょう。

〇根周りの水が停滞した状態が続くと病原菌が発生しやすくなるので、排水を良くし、かん水量を適正に管理しましょう。

## ■　今月のトピックス　アブラムシ類

### 被害について

　イチゴにはワタアブラムシやイチゴケナガアブラムシなど、様々な種類のアブラムシ類が発生します。親株床では、５～６月に小さな翅を持った有翅虫が飛来し、翅のない無翅虫（図１）を産んで増殖します。無翅虫はランナー先端部や未展開葉の隙間で増殖し、多発すると葉が萎縮し、草勢が低下します（図２）。

　本ぽにおける保温開始期以降は、直接的な吸汁害のほか、排泄物である甘露によってすす症が発生し、がくや果実が黒く汚れ、商品価値が著しく低下する被害が現れます（図３、４）。

### 防除対策について

　アブラムシ類は外部から飛来してくるので、施設開口部を防虫ネットで覆い、侵入を防ぎましょう。また、施設内外の雑草類はアブラムシ類やその他害虫類の増殖源となるので、除草しましょう。

　アブラムシ類は地際の葉裏や未展開葉の隙間など、薬剤が掛かりにくい場所に寄生することも多いため、防除を行う際は、薬剤の掛けムラのないよう丁寧な散布を心がけましょう。また、薬剤感受性の低下に繋がるため同一系統の薬剤の連用を避け、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

図1　ワタアブラムシ無翅虫

図2　アブラムシ類が多発した株

図3　甘露によるすす症（葉）

図4　甘露によるすす症（がく）